

老いのキャッチボール

老人ホームへ検診に行くことになった。初めての体験である。後学のため、という思いもある。

診察室の前の廊下で、車椅子に乗ったままうずくまっている女性がいたので、そっと声をかけてみた。

かっと目を見開いて私を睨みつけるや「ウンコ、ウンコしたい。デルデル」という。あわててスタッフを呼ぶと「ああ、この人の口癖です」「さあ、トイレへ行きましょう」といいながら車椅子を回転させて診察室へ運んだ。

今度は廊下で何やら興奮した怒声が聞こえてきた。声の主はこちらへ近づいてくる。そっとドアの隙間から様子を見る。

「オレの息子は医学博士なんだ。な・なんでオレを放っとくんだ」

長身で肉付きのいい赤ら顔の大男が若い職員の前で仁王立ちをしている。

そこへ年配の女性職員がやってきて、男性の手をとりながら深々と頭を下げた。大声は静まったが、待合室に来てからもまだ慥然としてブツブツいつている。

ナースが「もと、お医者さんです」と私の耳元で囁いた。

診察室へ丁重に招き入れると「オ・オレの息子は医学博士なんだ」とまたやりだした。

入居者のほとんどが加齢による運動機能の低下や認知障害があり、介護が必要である。しかし、中には習い事を続け、薄化粧もして自立性を保っている人もいる。ベテラン職員にこの職場での心得を聞いてみた。

「相手をとにかく褒めること、自分自身には心が萎えないように無理にでも笑顔をつくることですかね」と教えてくれた。

次に車椅子で入ってきた女性は髪を小奇麗に整え、鮮やかなピンクのマニキュアをしている。「オシャレですねえ、美人だからよくモテたでしょう」と投げかけると、「あなたもダンディでいらっしゃいますよ」と間髪を入れず、直球が返ってきた。

「・・・」不覚にも受けそこなうところだった。

老害

「引退した老人は社会的にはゴミである。家庭的・個人的にはそうでなくとも・・・」と、ある本で読んだことがある。

この冬、隠居中の私は暖地を求めて気ままな南国への旅に出た。帰国したのは二月下旬、深夜便を乗り継いで関西空港に着いたのは夜明け前である。予想以上に寒い。大阪への始発電車はほとんど空席だったが、連絡橋を越えると次第に通勤客で混み合ってきた。体が温まってきたころ、私は強烈な睡魔に襲われた。

気がつくと電車は駅からはるかに離れた途中で止まっている。

「ただ今、車内で急病人発生のため緊急停車しています」というアナウンスが聞こえた。

「爺さん、大丈夫か？」と隣の人が声をかけてきた。

「?・?・?」

周囲の乗客の視線は私に注がれている。車掌がやってきて

「歩けますか? 救急車を呼びましょうか?」という。

なんと、急病人とは私のことか?

乗客の誰かが、私のバク睡ぶりをみて緊急ボタンを押したらしい。すっかり目が覚めたが、なんともバツが悪い。

「次の駅で少し休ませてもらいます」と車掌に言った。

ホームでは二人の駅員が車椅子を用意して待機していた。

恥ずかしい、うずくまって病人らしくすることにした。

「急病人発生のため、電車が遅れましたことをお詫び申し上げます」というアナウンスがこの駅でも流れている。

申し訳ない。お詫びするのは電鉄会社ではない。この惨めな老いぼれである。現役世代の諸君、ごめん!